（完2、可2）

国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学
第９６回経営協議会議事要録

日　　時	令和３年９月１６日（木）１３：００～１５：４０
場　　所	北陸先端科学技術大学院大学　中会議室（本部棟２階）
出 席 者	寺野稔（議長）、永井由佳里、飯田弘之、西山和徳、黒田壽二、細野昭雄、相澤益男、井熊均、岩澤康裕、小俣一夫、久和進、中尾正文、永田晃也及び平澤冷の各委員
欠 席 者	谷本正憲委員
オブザーバー	三宅幹夫監事、水野一義監事、西本一志学系長、鵜木祐史学系長、山口政之学系長及び塚原俊文学系長

議事に先立ち、議長から、事前に送付した令和３年６月１７日開催の第９５回経営協議会の議事要録（案）について、資料１に基づき説明があり、原案のとおり承認された。

議　事

＜意見交換＞

１　博士後期課程学生に対する支援策について

飯田理事から、博士後期課程学生に対する支援策について、資料２に基づき説明があり、その後、意見交換が行われた。

・説明のあったプログラムは、手厚い研究費の措置を受けられるすばらしい制度で、採択された学生にとっては非常に重要な研究のリソースになっていくと思う。一方、採択に至らなかった学生との間で処遇面に開きが生じることは避けられず、それが採択されなかった学生の研究へのモチベーションを著しく減退させてしまうのではないかという懸念もある。その意味で、対象者のうち実際何割くらいの学生が採択される状況になるのか伺いたい。

⇒国費留学生や社会人学生を除くすべての学生が有資格者であるが、現実的な対象者は日本人学生と日本語が堪能な留学生となるため、５０名程度の応募で競争率２倍前後を想定している。本学では、これまでもドクトラルリサーチフェロー（DRF）という選考による給付制度を実施してきており、実際に不採択者も出ているが、研究のモチベーションが著しく下がるという弊害が生じているとは感じていない。

・申請時の書式は大学で決めたとのことだが、学生にはどのような内容のものを書かせるのか。将来研究者として自ら研究費の獲得にチャレンジしていく上で、今回のような機会が自分の研究内容について説明責任を果たしていく良い経験になると思うので、そのような

視点で書式の設定や審査が行われることを期待している
⇒ご指摘のとおりと考えており、今後の研究活動への良い経験となりうるような書式の設定を心掛けた。検討の結果、日本学術振興会の特別研究員（DC）の申請書の内容が最適であろうとの結論となり、そこに本プログラムの趣旨を反映させた質問を加えて書式を作成した。

・国からの予算措置が終了した後の対応として、同様の制度をJAIST独自に継続される考えはあるのか。
⇒本学における博士後期課程の学生向けの支援については、授業料の実質無償化、労働対価型の生活費の援助等、今後様々な形で充実させていきたいと考えているが、そのような支援策の１つとして、今回のプログラムについても、予算措置終了後もこれに近い制度で自走させていきたいと考えている。

・おそらく海外ではこのプログラムのような支援体制が当たり前になっているのではないかと思う。現状、日本の研究力が低下していることを考えたときに、やはり博士後期課程の学生をどのように増やして土台を固めていくかということが重要になる。
⇒ご指摘のとおりで、基本的に欧米先進国では、大半の博士後期課程の学生が何らかの財政的な支援を受けて進学すると伺っており、日本のように、財政支援なしに授業料を払っている学生というのは、あまり例がないのではないかと思う。より多くの優秀な博士後期課程学生の獲得と入学後の学生の活躍のため、支援制度については今後も検討を進めていきたい。

・このプログラムに応募するために掲げられた内容と、大学全体として取り組んでいる改革の方向はどのような関係になるのか。例えば、プログラムの応募条件のところに「挑戦的・融合的な研究を通じて」とあるが、標語として単に掲げる融合ということと、多様な学問がある中、それをどう融合させるのかということには、非常に大きな開きがあると思う。融合的な研究というものについて、学内の先生方がその趣旨を理解し、実態を伴うものとして学生に提供できるよう、今後議論を深めていただきたい。
⇒大学全体の方向性と異なる仕組みを作ってまで、このプログラムを取りにいくということは一切行っておらず、基本的には、大学全体で考えている取組を基に応募している。実態を伴った融合の実現に関しては、従来から行っている金沢大学との融合科学の共同専攻や、JAIST未来ビジョンとして掲げた新たな研究領域への再編、学内での先生方の研究連携と新分野・新領域開拓支援等の取組を進めている。そう簡単に実現するものではなく、なかなか難しいというのが実感だが、今後も先生方の連携や新たな分野への挑戦を促すための様々な方策を検討していきたい。

２　新たな研究推進体制について
　永井理事から、新たな研究推進体制について、資料３に基づき説明があり、その後、意見交換が行われた。

・JAISTでは、当初から人文社会科学を含めた知的な領域全体を俯瞰できるような枠組みを用意し、融合を促進するような教育に取り組まれている。また、学生が複数の専門性を身につけるということも、やはりすでにカリキュラムの中で実現している。この２点はJAISTだからこそ強調できる特色であるので、この構想を整備する上でもその点を強調し、表現の仕方を工夫されると、非常にスマートなものになっていくのではないかと思う。
⇒ご指摘のとおり、その点についてはもう少し強調する形で進めていきたい。

・第４期の科学技術基本計画以降、今日の政策ではバックキャスティングという考え方を非常に重視していて、それが大学のビジョンにも求められてきている。そのような視点で考えると、資料の中に「期待される効果」として、研究の取組がどのようなアウトカムに結びついていくのかを若干記載されているが、この部分をもう少し発展させる必要があるのではと思う。まず、２つのテーマからもたらされる効果の関連を分かりやすく記載した上で、JAISTとして目指したい将来像を具体的に提示し、それを実現していくためには、やはり既存の縦割りの学問分野ではなく、第６期科学技術・イノベーション基本計画で言われているような総合知が必要であることを示し、この総合知の実現に関しては、JAISTはその取組において一日の長があるということを、道筋を立てて記載されるとよいと思う。
Society 5.0という言葉は、曖昧、抽象的なところがあると思っているが、それだけにJAISTが目指すSociety5.0の形を具体的に示すことに大きな意味があるのではないか。
⇒JAISTとしてどこを目指してこのような取組を行っているかということについては、我々ももう少し明確にする必要性を感じている。今後新たな研究領域もスタートするので、先生方を巻き込む形で議論を進めていきたい。

・寺野学長が副学長時代から継続されてきた、エクセレントコアやマッチングハブ等の取組が、見事に実った成果の１つとして高く評価したい。一方、このような大学全体の取組に参加された先生方にとっては、自身の研究以外にプラスの義務のようなものが生じて、かえって研究業績にマイナスの影響が出てしまうのではという心配もあるがいかがか。
⇒今回の構想は、ご自身の研究を新しいところで展開し、北陸地域の他大学の研究者とも連携していきたいという先生方からのご提案をベースにしており、大学として支援し、新たな方向に先生方のお力を結集・融合させることによって、相乗効果が期待できるのではと考えたものである。よって、このような先生方の新たな分野への挑戦が、ご自身の研究にとってマイナスに働くことはないと考えている。

・研究成果の社会実装やイノベーションの推進は、今まさに大学に求められている機能であり、JAISTは、この地域におけるそのような活動を引っ張っている存在であると思う。学術における融合だけでなく、例えば社会との接点、外部資金との接点において、まったく違うエリアとの融合を図っていく際には、やはり人材に依るところは相当大きいと思うので、今回の構想を実現していくための人材戦略についてもぜひ検討されるとよい。

・今回の構想は、JAISTが得意としている領域を融合させながらシナジーを発揮して、新しい領域を開拓していくということで、非常によいチャレンジだと思う。ただ別の視点から見ると、研究者が自主的に研究に割く時間と研究力とは明確に相関しているため、この構想において、先生方がマネジメントに割く時間が増えてくることを懸念している。この構想を成功させるためにも、マネジメントに対するサポート体制をしっかりと作り、先生方が研究に没頭できる環境を作っていくことを検討いただきたい。
⇒ご指摘の点については、まさに我々も重要視しているところである。支援部隊に多大な人件費をかけることはなかなか難しいが、例えば大型の外部資金の獲得に関しては、それ専従のタスクフォースを作り、人材も確保している。また、先生方の研究のシーズの外部への働きかけに関しても、しっかりとサポートしていけるような体制を構築すべく、すでに計画を進めている。もう少し形が見えてきた段階で、また委員の先生方のご意見を伺いたい。

・今回のこの地域創生に関するイノベーションプログラムは、これまで出てきた地域を中心としたイノベーションプログラムとは異なり、大学改革の一環として出てきているものなので、新たな研究分野の話と同時に、人材育成が極めて重要な位置付けになってきており、そこをしっかりと認識することがまず重要である。それから、先ほどの博士後期課程の学生に対する支援プログラムにも言えることだが、このような施策に対応する際には、JAISTのキャパシティというものを認識し、しっかりとした姿勢を保っていかなければならない。先ほど寺野学長が説明されたように、プログラム獲得のために安易に飛び付くのではなく、JAISTのビジョンとして向かう方向があり、そこに合う施策を利用していくという姿勢が最も重要である。なお、第４期中期目標・中期計画の目標設定において、JAISTは、「地域の産業界をリードする」という項目ではなく、「世界トップレベルの研究大学を目指す」という項目を選択しているが、決して地域を無視しているわけではなく、このような形で地方創生も進めていくということを説明されていくとよいと思う。
⇒世界トップの研究大学を目指し、世界トップの研究を進めながら、それを背景とした人材育成と地域社会への貢献にも取り組むということについて、今後も配慮していきたいと思う。施策に振り回されることなく、JAISTとしてどうあるべきかということをしっかりと認識しながら進めていきたい。

＜審議事項＞

１　第４期中期計画における「その他の記載事項」について

評価・広報室長から、第４期中期計画における「その他の記載事項」について、資料４に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

なお、追加・修正等の必要が生じた場合の対応については、学長に一任された。

また、委員から以下のとおり意見が述べられた。

・レポートの中で、マイナンバー未取得の学生・教職員に定期的に通知を出すということが書かれていて、これは国からの指示があってのことと思うが、国の施策と現場の動きが乖離し、なかなか普及が進んでいないのが現状ではないかと思う。大学という現場において普及を進めるための工夫を行い、それを国にフィードバックするという役割も大学にあるのではないかと思う。
⇒マイナンバーカードについては、私も含めてほとんど活用してない状況で、確かにもう少し工夫をしていかないと学生はなおさら使わないと思う。大学としても、普及になるべく貢献できるように考えていきたい。

２　令和３年度国立大学法人ガバナンス・コードへの適合状況について
評価・広報室長から、令和３年度国立大学法人ガバナンス・コードへの適合状況について、資料５に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

＜報告事項＞
１　国立大学法人経営改革促進事業（北陸未来共創フォーラムマテリアル分科会）について
永井理事から、国立大学法人経営改革促進事業（北陸未来共創フォーラムマテリアル分科会）について、資料６に基づき報告があった。
また、委員から以下のとおり意見が述べられた。

・このプログラムに対して、各大学が本気で成果を挙げるために参加しているのかが少し気になった。分科会の構成として、マテリアル分科会、先端エレクトロニクス分科会等となっているが、これが各大学の一押しのテーマで構成されているのか、それともマテリアル、先端エレクトロニクスという分野ありきで構成されたのかを伺いたい。また、このような取組は産業界との連携も重要になるので、そのような視点も重視していただきたい。
⇒本学からは、先ほど意見交換２の議題のご説明の中で挙げた、大学として融合を支援していく２つのテーマで参加している。その意味では、他大学がまったく同じ気持ちでいるかはわからないが、少なくとも本学としては、これから本気で力を入れて発展させるつもりのテーマと、将来を見て本学のエースになり得る先生方をここに出している。また、産業界との連携については、実はすでに参加いただいている地域企業もあり、今後も参加企業を募集していく計画なので、地域企業を巻き込み、協力をお願いしていくということがコンセプトとして入っている。

・このプログラムにおいて北陸の地方創生をテーマに大学の関係者が協力する中で、基本的には工学系の先生方を中心とするグループ編成になっており、なぜ地域経済等の社会科学的な視点を持つ研究者のグループが構成できないのかと疑問に思った。北経連や自治体の関係者等も巻き込んで、北陸地域の経済の活性化や北陸地域における第二創業等に関する政策的な議論をできる場として構成できれば、もっと横に展開していくような動きがあり得たのではないかと思うし、総合知というものを目指す姿とも連動していくのではないかと思う。

・今ほどのお話に関連して、ご指摘のように大学で経済や地域社会の研究をやられている先生方と経済界とのネットワークができないかとずっと考えており、先日、ようやく意見交換をする場をセットすることができた。今後、北陸の経済の発展のためにはどうしたらよいかということを、経済界と大学、それに行政に携わっている方等も巻き込んで、自由に意見交換ができる場ができるよう、そのような取組をますます発展させていきたい。
⇒私自身も社会科学的なアプローチには大変興味があるので、ぜひそのような場にも参加させていただきながら、ご指摘の点については今後も意識していきたい。

２　第３期中期目標期間（４年目終了時評価）に係る業務の実績に関する評価結果について
　評価・広報室長から、第３期中期目標期間（４年目終了時評価）に係る業務の実績に関する評価結果について、資料７に基づき報告があった。

３　決算情報等について
　会計課長から、決算情報等について、資料８に基づき報告があった。

４　令和３年度会計監査人の選任について
　監査室長から、令和３年度会計監査人の選任について、資料９に基づき報告があった。

５　令和３年人事院勧告について
　人事労務課長から、令和３年人事院勧告について、資料10に基づき報告があった。

６　令和３年度入学者数について
　教育支援課長から、令和３年度入学者数について、資料11に基づき報告があった。

７　最近の本学の活動状況について
　学長、永井理事及び評価・広報室長から、最近の本学の活動状況について、資料12に基づき報告があった。

＜その他＞
１　次回の開催について
　議長から、次回の本協議会の開催を令和３年１１月１８日（木）に予定している旨の説明があった。

資料

1　第９５回経営協議会議事要録（案）
2　次世代研究者挑戦的研究プログラムについて
3　未来創造イノベーション推進本部について
4　第４期中期計画における「その他の記載事項」について
5　令和３年度国立大学法人ガバナンス・コードへの適合状況について
6　国立大学法人経営改革促進事業（北陸未来共創フォーラムマテリアル分科会）について
7　第３期中期目標期間（４年目終了時評価）に係る業務の実績に関する評価結果について
8　平成31年度決算情報等
9　令和３年度会計監査人の選任について
10　令和３年人事院勧告について
11　令和３年度入学者数について
12　最近の本学の活動状況について